常葉大学造形学部
紀要　第13号・2015
土屋和男
TSUCHIYA Kazuo
2014年11月14日 受理

御殿場の田舎家 －樺山別邸、西園寺別邸、井上別邸＝秩父宮御別邸－

About the 'Inakaya' (Country Cottage) in Gtenba The Villa of Kabayama, the Villa of Saionji, the Villa of Inoue: the Villa of Prince Chichibu later

1．はじめに

一般に田舎家とは、古い民家を移築し、手を加え、茶室や別荘として改修したものと考えられる。明治中期から昭和初期にかけて、政財界に重きをなす富裕層によって形成された、茶の湯を趣味とする人々（近代数寄者）によってつくられたものが多く、その中心人物は益田孝（鈍翁）であった。筆者はこれまで、こうした田舎家について考察してきたが[1]、民家を改修した田舎家の施主は茶人以外にも拡がっており、いわば広義の近代数寄者とでもいえるような富裕層もその趣味を共有していたと見られる。本稿では、茶人以外を施主とする田舎家として静岡県の御殿場に存在した3棟を報告する。

御殿場は東京から近い高原別荘地として、東海道線開通後、明治中期から開発が行われてきた。特に丹那トンネルが昭和9（1934）年に開通し東海道線のルートが変わるまでは、大磯、小田原等の湘南から沼津、興津等に至る避寒地の間に位置する避暑地として賑わうとともに、箱根、富士山への入口としての位置も利があった（図1-1）。別荘地としての御殿場の形成史については、勝又宏幸氏らによるもの[2]、御殿場市教育委員会によるもの[3]があり、西園寺別邸に関しては石川祐一氏による研究[4]がある。

2．樺山資紀、樺山愛輔別邸

明治39（1906）年に土地を取得したとされ[5]、御殿場における田舎家として早い時期のものである。樺山愛輔の伝記といえる『樺山愛輔翁』によれば、父、資紀が狩猟のために共同で入手した「二十五万坪ばかりの土地」に、「建坪が百六十五坪」[6]の民家を移築したという。愛輔の娘である白洲正子によれば、「もとは庄屋の屋敷であったという家は、間口が二十間も」[7]あったといい、その写真も伝えられている[8]（図2-1）。長大な草屋根を持つ家であり、別の側面から撮られた写真では、屋根は兜造りで2階が設けられていたと見られる[9]（図2-2〜4）。

その内部は愛輔の孫、紀一によって次のように語られる。「一番大きな部屋は百畳敷位、それが応接間です。あとは囲炉裏の切った部屋や何かありますが、本当の田舎風です。二階は昔のお蚕部屋を直したもので、帝国ホテルにも富士屋ホテルにもない位の、立派な西洋間に作ってあります。そういう事がすごくお上手だったのです。家を建てたり直したりを、大変な御趣味でなすった」[10]。ここからわかるのは、愛輔がいわば普請道楽で、内部を洋風に改造していたことである。後述する西園寺公望の孫である西園寺公一は、近隣に避暑に来て樺山別邸に出入りしていたといい、「大きな、古い百姓家を半分西洋風に改造した、好い趣味の家であった」[11]と評している。祖父の別荘のある御殿場で、彼のいう「貴族」によって田舎家趣味が共有されていた様子がうかがえる。

また、愛輔の妻常子の、大正9（1920）年に出版された歌集の佐佐木信綱による序文には、「近き里の旧家を移しもて来し萱ぶきの家居ながら、家ぬちは大いなる円柱を中に、暖炉をきづきて（中略）なべて主人が好めるとつ国の片田舎ぶりに造り改めたり」[12]とある。これについては、土間を改造したと思われる板の間に、梁や束の間を白い壁とした内装の写真が伝えられている[13]（図2-5）。後述する井上別邸と共通する意匠であるが、遅くとも大正9年には改造されているとすると、椅子座の洋間をもつ田舎家としては早い時期に属すると見られる[14]。

他方、樺山別邸に関して注目すべきは、常子の指示によるという作庭である。白洲正子によれば、この作庭にあたったのは近代数寄者のスポークスマンと目される高

1）拙稿「近代数寄者の茶会記録に見られる「田舎家」に関する記述」『日本建築学会計画系論文集』第78巻687号、pp.1151-1160、2013.5等
2）勝又宏幸、安島博幸「戦前の御殿場における高原リゾートの成立と展開」『日本都市計画学会学術研究論文集』第25回、pp319-324、1990.10
3）『御殿場の別荘』御殿場市教育委員会、1996
4）石川祐一『近代建築の夜明け―京都・熊倉工務店 洋風住宅建築の歴史』淡交社、2006
5）前掲『御殿場の別荘』p.57
6）グルー基金、バロクロフト奨学基金、国際文化会館編『樺山愛輔翁』国際文化会館、1955、p.201。同書p.233、p.346にも類似の記述がある。
7）白洲正子「白洲正子自伝　富士の裾野にて」『芸術新潮』第42巻5号、新潮社、1991.5、p.134。なお、白洲正子は後に夫次郎とともに、民家を手に入れて田舎家を住まいとすることは周知のことである。
8）山崎省三「若き日のノートから探る 白洲正子とは何者だったか」『芸術新潮』第50巻12号、新潮社、1999、p.183
9）前掲『樺山愛輔翁』口絵
10）前掲『樺山愛輔翁』p.203。同書には、「門は茅葺きですが、これは徳川家康が、豊臣の残党に追い廻された時、その下にかくれたという由緒のある、三、四百年の古い物。家も二百年以上たってるのを、おじい様が造り変えなすってからでも、六十年位になりましょうが、今でも壁なんかまっ白、ちっとも汚れておりません」という逸話も紹介されている（p.204）。
11）前掲『樺山愛輔翁』p.114
12）樺山常子『富士の裾野にて』竹柏会、1920、p.1
13）白洲正子「白洲正子自伝　故郷は遠くにありて」『芸術新潮』第42巻7号、新潮社、1991.7、p.122。前掲『芸術新潮』第50巻12号、p.183
14）こうした田舎家は団琢磨のものが知られ、団は既に大正4年に田舎家を移築しているが、椅子、テーブル、ストーブ等の記述が現れるのは昭和2年の仙石原別邸、昭和5年の葉山別邸においてである（高橋箒庵著、熊倉功夫編『昭和茶道記』上巻、淡交社、2002、p.96,436,503）。

図 1-1　御殿場と他の別荘地との位置関係

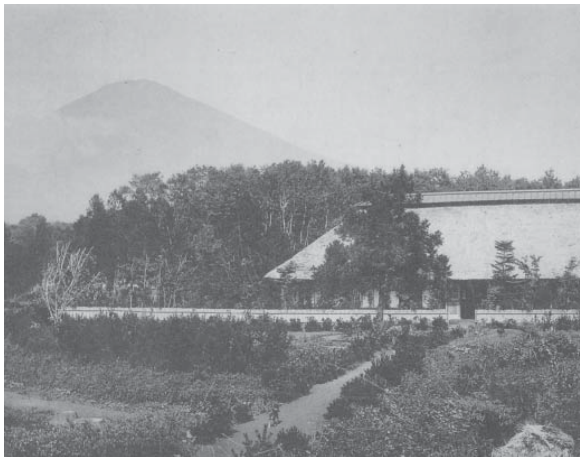

図 2-1　樺山別邸　長大な屋根（『芸術新潮』第 50 巻 12 号）

図 2-2　樺山別邸　2 階の見える妻面（『樺山愛輔翁』）

図 2-3　樺山別邸　兜造りの屋根（『御殿場の別荘』）

図 2-4　樺山別邸　長屋門（『樺山愛輔翁』）

図 2-5　樺山別邸　柱梁が見える洋間（『樺山愛輔翁』）

図 3-1　西園寺別邸　当初のものと思われる外観
（『近代建築の夜明け』）

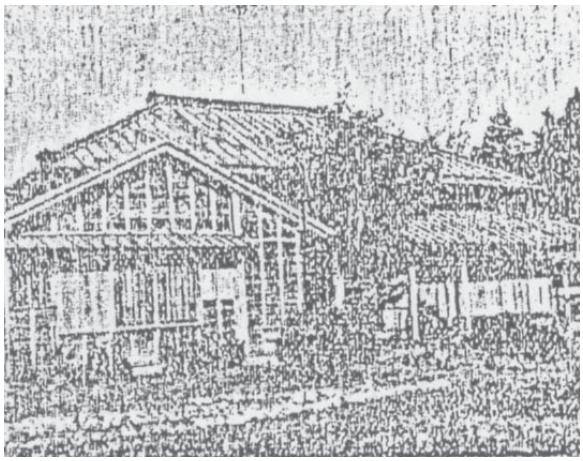

図 3-2　西園寺別邸　関東大震災後と思われる外観
（『西園寺公爵警備沿革史』）

橋箒庵であったという[15]。大正元年から9年まで書き継がれた箒庵の詳細な日記『萬象録』に樺山別邸の記述がないことからすると[16]、この作庭が行われたのはこれより後で、正子がアメリカに留学する大正13年夏までの間と見られる。正子は庭師の名を不明としつつ、その仕事ぶりを特筆しているが、この庭師は『萬象録』の記述からみて、当時の箒庵としばしば行動を共にしていた松本亀吉ではないかと推測される[17]。

『樺山愛輔翁』の記述から、それが出版された昭和30年頃までは樺山家の所有であったと見られるが、その後、手を離れ、敷地は昭和36（1961）年に中学校となり[18]、建物は箱根仙石原に移築された。平成3（1991）年の時点での写真が伝えられているが[19]、その後は不明である。

3．西園寺公望別邸

大正9（1920）年ないしは大正11年に建設されたが、関東大震災で被災し、翌年建て直したと伝わる。建設の経緯については諸説あり、外観写真を検討すると、いずれも寄棟の大規模農家で、同一建物であろうと認められるが、次の点で異なっている。大正9年建設とするものは、母屋、下屋共に瓦葺きで棟上に空気抜きの小屋根が載っている[20]（図3-1）。大正13年再建とするものは、撮影の角度は似ているが、「亜鉛葺」とされ小屋根がない[21]（図3-2）。さらに解体直前に撮られたものは、母屋は茅葺き、下屋は瓦葺きで、棟上ではなく、屋根面から窓が開いている[22]（図3-3〜4）。これらの相違を考察すると、当初瓦葺きで施工したものが関東大震災で破損し、金属板葺きに改められ、その後さらに茅葺きに変わったのではなかろうか。

近隣の小林家から建物を買い取り[23]、移築、改造した田舎家であったが、改造にあたっては、西園寺の秘書、中川小十郎との関係から、京都の岸田組が請け負ったことが明らかになっている[24]。大震災後の建設では、「湿気防止の為め、床下は相当深く掘下げて砂利、木炭を敷詰めて湿気を吸収せしめ、壁間には筋違、違梁、火打梁等縦横に入れて震害防止に特に意を拂はれたもの」[25]とされ、居住環境や耐震性能を考慮した近代住宅として田舎家がつくられている。

静岡県警が残した配置図（図3-5）と平面図（図3-6）によれば、玄関を北東に向け、その東に応接室、奥の2間続きを南面させ主人の居室に充てるという、元の農家の平面とは南北が逆転に近い配置がなされていた。元の土間には執事室等が置かれ、洋間には改造されていなかったと思われる。居室のさらに東側に、別棟としてベランダをもつ洋間が増築されたが、これは昭和11年頃のことと推測される[26]（図3-7〜8）。解体直前の写真によると、応接室の壁は全て板張りで、天井を張らず梁組が現しになっており、床は畳が敷かれているが平面図には椅子と思われる描き込みがあることから椅子座を想定した意匠の可能性がある（図3-9）。主人の居室にある床の間は（図3-10）、床脇の棚や狆潜り等が西園寺の興津別邸・坐漁荘1階と全く同じであり（図3-11）、京都別邸・清風荘にも床の間と床脇を反転した意匠がある（図3-12）。また、洋間の壁や天井の仕上げ、ガラス桟の菱形格子などにも坐漁荘と共通した意匠が見られる（図3-13〜14）。さらに、御殿場別邸建設の際の施工関係者によれば、洗面所を興津と同じにするよう言われ、寸法を取りに行ったという[27]。これらは、おそらくは西園寺好みとでもいうような共通の仕様の下につくられたと推測される[28]。

西園寺は御殿場別邸建設以降、興津別邸を事実上の本拠としつつ、東京本邸、京都別邸、御殿場別邸との間を定期的に行き来したが、毎年夏は御殿場で過ごすのが慣例となり、これは大正12年以降、他界する前年の昭和14年まで17年間にわたって続いた[29]。

西園寺家の手を離れてからは企業の保養所として利用されたりしたが、昭和63（1988）年に滅失した。

4．井上準之助別邸

大正15（1926）年に井上準之助が建物を取得、翌昭和2年に移築、改造し、その後、昭和16（1941）年に宮内省が買い上げ、秩父宮家の御別邸となったものであ

15）前掲『白洲正子自伝』p.57
16）高橋義雄著、大濱徹也、熊倉功夫、筒井紘一校訂『萬象録：高橋箒庵日記』第1-8巻、思文閣出版、1986-1991を通読したが当該記述は見当たらなかった。
17）前掲『萬象録』第1巻、p.279等
18）前掲『御殿場の別荘』p.59
19）前掲「白洲正子自伝　富士の裾野にて」p.134、同「故郷は遠くにありて」p.122
20）前掲『近代建築の夜明け―京都・熊倉工務店 洋風住宅建築の歴史』p.89
21）『西園寺公爵警備沿革史』静岡県警察部、1941、p.10,13。同書には大正11年に建設したものが、関東大震災で倒壊したので取り壊し、大正13年に建設したとあるが、ここで考察しているように大正13年は補強、修繕であったと推測される。小田原等の例を見ても大震災後の補修では屋根は金属板葺きに改めた例が多い。
22）前掲『御殿場の別荘』表紙、御殿場市教育委員会蔵の写真
23）前掲『西園寺公爵警備沿革史』p.9、前掲『御殿場の別荘』p.75
24）前掲『近代建築の夜明け―京都・熊倉工務店 洋風住宅建築の歴史』p.88,134。京都の大工が手がけたという話は地元でも伝わっている（前掲『御殿場の別荘』p.76）。
25）前掲『西園寺公爵警備沿革史』p.9
26）「帝都反乱事件直後に建てられた新館」とある（前掲『西園寺公爵警備沿革史』p.9）。
27）前掲『近代建築の夜明け―京都・熊倉工務店 洋風住宅建築の歴史』p.134
28）付言すれば、床の間は新居浜の住友家初代総理事広瀬宰平邸にも、よく似た意匠がある。住友家第15代友純は西園寺の弟であり、西園寺の経済的基盤は住友が用意したことから、強い関連性がうかがえる。また、御殿場の樺山別邸の近隣には住友家第3代総理事鈴木馬左也の別邸が存在し、これも民家を改造した田舎家であったという（前掲『御殿場の別荘』pp.53-55）。
29）立命館大学『西園寺公望伝』別巻2、岩波書店、1997、pp.348-355、前掲『西園寺公爵警備沿革史』

図 3-3　西園寺別邸　1988 年の南側外観
（御殿場市教育委員会提供）

図 3-4　西園寺別邸　1988 年の北側外観、
左が別棟洋間（御殿場市教育委員会提供）

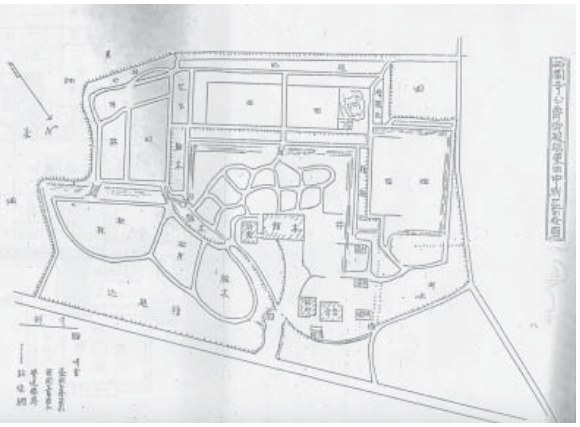

図 3-5　西園寺別邸　配置図、上が南西
（『西園寺公爵警備沿革史』）

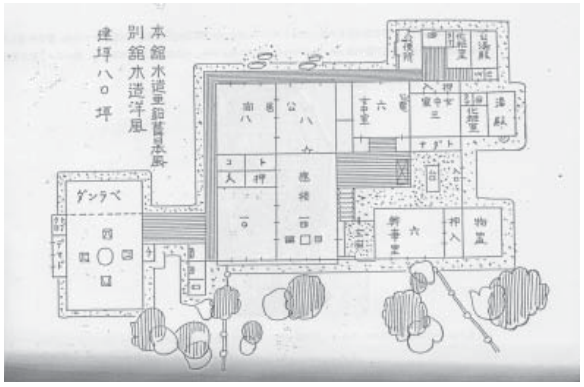

図 3-6 西園寺別邸　平面図、北東に玄関、南西に居間
（『西園寺公爵警備沿革史』）

図 3-7　西園寺別邸　洋間（御殿場市教育委員会提供）

図 3-8　西園寺別邸　洋間（御殿場市教育委員会提供）

図 3-9　西園寺別邸　板張りの応接室
（御殿場市教育委員会提供）

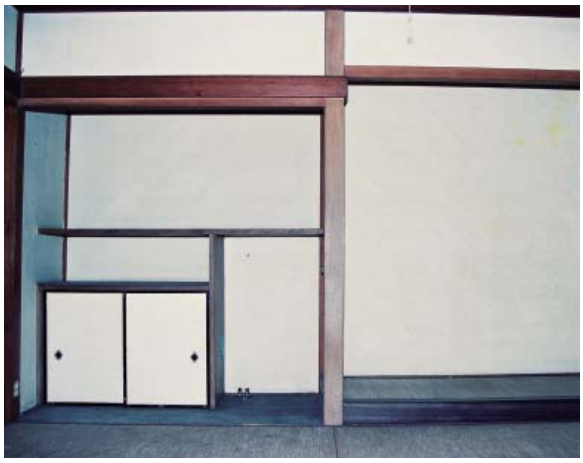

図 3-10 西園寺別邸　居間の床の間
（御殿場市教育委員会提供）

図 3-11　西園寺興津別邸・坐漁荘　床の間

図 3-12　西園寺京都別邸・清風荘　床の間

図 3-13　西園寺興津別邸・坐漁荘　洋間

図 3-14　西園寺興津別邸・坐漁荘　洋間

図 4-1　井上別邸＝秩父宮御別邸　西側外観

図 4-2　井上別邸　小宮山家の古写真（『落武者の史録』）

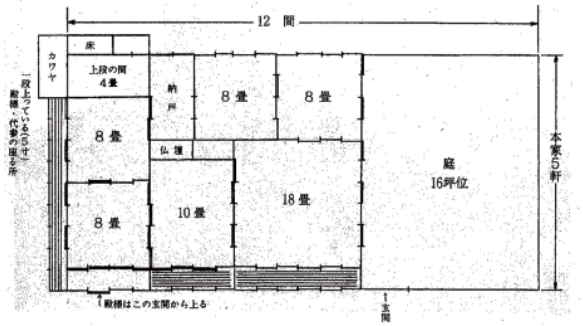

図 4-3　井上別邸　小宮山家時代の間取り（『史誌ふかさわ』）

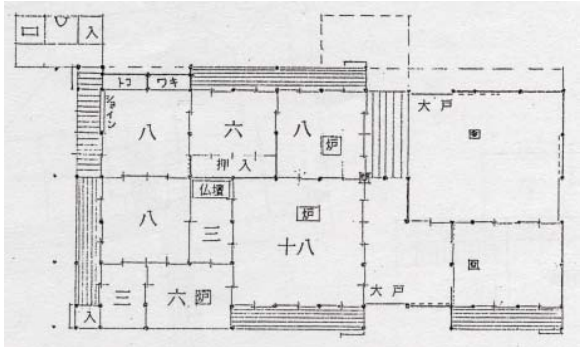

図 4-4　井上別邸　移築前のものとされる間取り
（『現況建物調査報告書』）

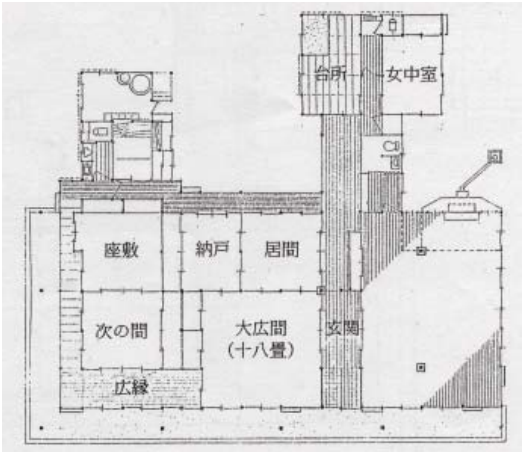

図 4-5　井上別邸　移築後の間取り（『現況建物調査報告書』）

図 4-6　井上別邸　東側外観、鉄筋コンクリートの布基礎

図 4-7　井上別邸　土間を改造した洋間

図 4-8　井上別邸　洋間の飾り棚、ゴシック的な意匠

図 4-9　井上別邸　洋間のレンガの暖炉、ハーフティンバー

図 4-10　井上別邸　座敷の床の間

図 4-11　井上別邸　座敷西側縁、長押裏に打たれたボルト

る。平成8（1996）年に御殿場市に遺贈され、現在、秩父宮記念公園として、土地、建物ともに公開されている（図4-1）。

建物に関しては、井上から近隣のかつて名主を務めた小宮山家に宛てた、「買受証」の記録があり[30]、その記念として撮影したという小宮山家の写真も伝わっている[31]（図4-2）。小宮山家では享保年間の建築と伝えられていたが[32][33]、秩父宮家時代に、棟札のX線による解読と普請帳の発見があり、ともに享保8年の記載があったという[34]。田舎家は改造することが自明であり、現存する建物がどの程度享保の姿を残しているかは定かではないが、来歴がわかることは他の田舎家の中にあっても貴重なことである。移築前の建物については2つの平面図が伝わっており、西奥の座敷、次の間付近の間取りが異なっている。一方は床の間付き上段4畳、座敷8畳、次の間8畳と続き[35]（図4-3）、他方は床の間付き座敷8畳、次の間8畳の手前に3畳と6畳がある[36]（図4-4）。現状の建物の痕跡等からは、どちらであったかは判別しかねる。

井上別邸時代の移築では、建物は小高い場所に南を正面に置かれ、西の座敷から富士山が望めるように配置された。主な改造は次の通りである（図4-5）。

1）鉄筋コンクリート布基礎。関東大震災から数年後、耐震性に対する考え方が大きく変わった時期であり、伝統的な民家を布基礎にボルト止めしたごく初期の例と見られる（図4-6）。
2）土間を洋間に改造。土間に床を張り、既存の大きな柱梁を活かし中世ヨーロッパのカントリーハウス風に設えている。2本の大角柱が自立し、手斧跡を見せた梁が結んでおり、鴨居より上は等間隔の束がハーフティンバー風の意匠をつくっている。造り付けの飾り棚の尖頭アーチ、レンガの暖炉、ステンドグラス風の建具などゴシック的なデザインが見られる（図4-7〜9）。
3）外周にガラス建具設置。縁付近の間取りを変更。
4）座敷、次の間周辺の改造。長押裏にボルトを入れ耐震性能を期待して補強がなされている。また、天井を銘木に張替えている。さらに、広縁と次の間境の建具に板戸を用いるなど特異な建具が見られるが、秩父宮御別邸時代にも変更がなされたと思われる（図4-10〜12）。
5）便所浴室、離れ台所等増築。これらは秩父宮御別邸時代にも適宜変更が加えられた。
6）照明器具、家具等の設備。洋間等に残る照明設備の多くは井上別邸時代のものと思われる（図4-13）。

これらの改造のなかで、とりわけ洋間に関しては、明らかに英国等の住宅との類似性を意図したもので、ゴシック・リヴァイヴァルの中世趣味、カントリー志向と（図4-14〜16）、日本の民家の親和性に着目した改造で、茶室以外の田舎家の用例を示す端的な例といえる。デザインの完成度からして、何らかの建築的な専門家の関与があったと考えられるが具体的には不明である。先に見た樺山別邸や田舎家を好んだ団琢磨らの別邸群がいずれも失われている現状からすると、田舎家によって表現される美意識を示す事例としてきわめて貴重といえる。

井上別邸時代の写真からは、主屋周辺は芝生の広がる庭であったことがわかる。井上準之助はここで趣味のゴルフとテニスを楽しんだという[37]（図4-17〜21）。井上は日銀勤務時代にイギリス、ベルギーに留学、アメリカに勤務しており、大正13年にイギリスに出張した際には、かつての知人から「田舎ノ宅ニ招待ヲ受ケ（中略）三日程滞在致シ誠ニ愉快ニ感ジ申候」[38]という書簡を残している。御殿場別邸は建物、庭園とも施主の経験が反映されたものということができよう。

5．秩父宮御別邸

秩父宮御別邸としては、結核を患っていた雍仁親王の療養を目的に使用された。昭和17年に、現在は失われている別棟を増築したが[39]、戦時下のことでもあり質素なものであったと伝えられる[40]。御別邸としては樺山別邸も候補に挙がったというが、採光の良さから井上別邸が選択されたという[41]。

秩父宮御別邸時代には座敷、次の間前の南側、西側が2重建具となった。南側の2重建具は縁を広げて井上別邸時代には吹放しであった最南列の柱を利用して建て込まれた。これらの追加分にも井上別邸時代の桟の

30）前掲『御殿場の別荘』p.33
31）小宮山伊公『落武者の史録』小宮山資料館、1990、p.198,242
32）『史誌ふかさわ』深沢報徳愛郷会、1983、p.158
33）井上準之助の別荘生活を伝えた新聞記事に、「二百三十年前からの歴史ある近在の農家を買つて改築したといふ自慢の「皆山堂」」（『東京朝日新聞』昭和6年4月27日）とあり、時代は概ね一致する。なお、この記事に掲載された写真のうち1枚と同じ紙焼きが清渓文庫に所蔵され、その裏の印に「東京朝日新聞社撮影」とある。これらの写真は後掲『清渓おち穂』にも使われ、御殿場別邸での様子を伝える数少ないものである。
34）前掲『落武者の史録』pp.200-202
35）前掲『史誌ふかさわ』p158。この平面図は小宮山家の伝承によると思われる。
36）『（仮称）秩父宮記念公園基本設計及び構造調査業務委託　現況建物調査報告書』御殿場市、日本公園緑地協会、1999、p.4,18。建築を職業とする人物によって伝えられたと思われるが、おそらく報告書作成段階で描き直されており、原典がいかなるものであったかは不明である。
37）『清渓おち穂』井上準之助論叢編纂会、1938、pp.107-110。同書p.144には御殿場別邸の暖炉前で読書をする井上の写真も掲載されている。また、同書pp.28-30には、井上が大磯に建てた「富春堂」も秦野から移築した田舎家であり、やはり田舎家を所有していた原富太郎（三渓）が、それを井上の別荘だろうと言い当てたという逸話が紹介されている。
38）『井上準之助論叢』第4巻、井上準之助論叢編纂会、1935、pp.450-451
39）『（仮称）秩父宮記念公園基本計画策定業務報告書』御殿場市、日本公園緑地協会、1998、p.38
40）秩父宮家『雍仁親王実記』吉川弘文館、1972、p.673
41）前掲『雍仁親王実記』p.717

図 4-12　井上別邸　次の間、縁側に松皮菱格子入りの板戸

図 4-13　井上別邸　広間、囲炉裏の横に吊り下げられた照明器具

図 4-14　レッチワース・ガーデンシティ（イギリス）の草屋根の住宅、20 世紀初頭のカントリー志向の一例

図 4-15　ウィリアム・モリス自邸レッド・ハウス（イギリス）、ゴシック・リヴァイヴァルのインテリア

図 4-16　ウィリアム・モリス自邸レッド・ハウス（イギリス）、レンガの暖炉、ハーフティンバー

図 4-17　井上別邸　南側芝生の庭、富士山を望む井上準之助（『清渓おち穂』）

図 4-18　井上別邸　洋間、暖炉前の井上準之助（『清渓おち穂』）

図 4-19　井上別邸　入口アプローチの井上準之助（『清渓おち穂』）

◇春のズンレ◇

図 4-20 井上別邸における井上準之助（『東京朝日新聞』昭和 6 年 4 月 27 日）

緊縮臧相——
別荘の一日
天下泰平の井上さん

図 4-21　井上別邸における井上準之助（『大阪朝日新聞』昭和 6 年 4 月 27 日）

図 4-22　秩父宮御別邸　御別邸時代に付加された 2 重建具、南側

図 4-23　秩父宮御別邸　御別邸時代に付加された 2 重建具、西側

図 4-24　秩父宮御別邸　玄関に飾られたシカの剥製、秩父宮殿下の所蔵品

図 4-25　秩父宮御別邸　御別邸時代につくられた陶芸工房「三峰窯」、御別邸の一部として保存されている

意匠が踏襲されている（図4-22〜23）。

秩父宮殿下はイギリス、オックスフォードに留学、妃殿下はアメリカで勉学されたということからも、欧米の文化における「田舎」への志向に親しんでいたと推察される[42]。加えて妃殿下は幼少期から樺山家と交流があり、その別邸をたびたび訪れていたという[43]。これらからしても、戦時下の療養が御別邸としてのはじまりとはいえ、田舎家は両殿下の趣味にも適っていたと思われる。例えば、玄関の一角に飾られたシカの頭部の剥製には[44]、次のように読める銘板がある。

H.I.H.PRINCE CHICHIBU／INVERMORISTON／16TH SEPT.1925.

秩父宮殿下／インヴァーモリストン（スコットランドの地名）／1925年9月16日

すなわち、秩父宮殿下がイギリス留学中に贈られたものと思われるが、当然、井上別邸時代にはなかったはずである。しかしそれは、はじめからそこあったかのように田舎家の空間に設えられており、これは殿下の所蔵品とこの建築物の相性の良さを示す事例である（図4-24）。

戦後に小康を得た時期には、殿下自ら農園で作業したり、陶芸に取り組まれたりした。座敷前南側縁下に収納されている野菜乾燥用のトロッコは殿下の発案であると伝えられている[45]。また、昭和25（1950）年に建設された陶芸のための工房「三峰窯」[46]が現存しており、田舎家における生活を表現する付属棟として貴重な姿を残している（図4-25）。

戦後期には沼津御用邸との間でたびたび行幸啓があり[47]、皇室のリゾートエリアとなっていたことがわかる。両殿下は昭和27年1月に鵠沼御別邸に移られたが、その年の夏、秋も御殿場で過ごされ[48]、殿下は薨去の数ヶ月前まで利用された。その後は平成4年に現新館増築、洋間煙突撤去、北側廊下雨戸庇等改修が行われ、平成7年の妃殿下薨去まで御別邸として使い続けられた。

6．まとめ

田舎家は狭義の近代数寄者だけでなく「田舎」への志向をもつ人々によっても建てられていた。既存の民家を移築、改造した田舎家は、住宅としての意図や思想が新築のようには現れない。元の民家の作り手は、デザイナーではなく、場合によっては専門の職人ですらない。この、いわば民家の匿名性、無名性を、田舎家の施主たちは好んだといえる。無名であるだけに、かえってそれを見いだし、手を加える主人の生活と意見を表現するものとなったのである。

一般に田舎家がつくられた時期は、関東大震災以後、昭和初期をピークとするが、これは明治期に欧米の教養を学んだ人々が、長じて別荘の施主となった時期と重なる。田舎家、とりわけ土間を改造した洋間は、19世紀の欧米において流行した中世趣味を日本の民家に重ね合わせたものと考えることができ、時代の要請から生まれ、施主の趣味を表現した、日本の近代が到達した独自の意匠ということができる。御殿場の事例はそれらを端的に示すものである[49]。

（引用部において、一部旧漢字を常用漢字に改めた）

謝辞

本稿をまとめるにあたり、清渓文庫の井上幸一氏、御殿場市教育委員会社会教育課の勝俣竜哉氏、岸かおり氏のご協力をいただきました。謝意を表します。

[42] 前掲『雍仁親王実記』p.717、秩父宮妃勢津子『銀のボンボニエール』主婦の友社、1991、p.299 等

[43] 前掲『銀のボンボニエール』p.31。付言すれば、昭和 20 年に「パン焼きかまど築造のため白洲次郎参邸、設計作業」（『雍仁親王実記』p.688）の記事も見られる。

[44] 図 2-5 に見るように樺山別邸の写真でも同様のものが認められた。

[45] 前掲『雍仁親王実記』p.718。付言すれば、昭和 21 年に「今和次郎参邸、御会食」（p.712）の記事も見られる。今和次郎は当時早稲田大学建築学科教授。『日本の民家』によって建築史研究のスタートを切った。

[46] 前掲『雍仁親王実記』p.768

[47] 前掲『雍仁親王実記』p.751 等。付言すれば、昭和 23 年に東京からの帰途「小田原益田邸にお立寄り」（p.740）の記事も見られる。益田家の先代、孝は田舎家を主導したことで知られる。

[48] 前掲『雍仁親王実記』p.799,807

[49] 本稿は「御殿場における田舎家について　井上準之助別邸＝秩父宮御別邸を中心に」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2014.9 の内容を発展させ、大幅に加筆し、図版を加えたものである。